

なぜ貫太は、いつしよに旅行に来ていながら別行動をしたわたしを責めないのだろう。なぜわたしのことを何も疑わずに、いつも変わらぬ笑顔を浮かべているのだろう。

貫太ののんきで甘い、どこか顔色をうかがうような言いかたが、凜子の気持ちを苛立たせた。

「貫ちゃん」

「なに？」

「今日わたしがどこへ何をしに行ったか、教えてあげましょうか。なぜ何も聞かないの？」

凜子は鋭い声を出していた。

慌てたときや本気になったときにはいつもそうなるように、このときも言葉自体は標準語だが、凜子の話す言葉にはふるさとのアクセントがついた。

貫太は首を少しだけ傾けながら、凜子を悲しげな目で覗き込む。そして凜子に次のセリフを言わせまいと、口を開いた。

「ぼくにも言いたくないことや秘密はある。お互いさまだ。だから、君も何もかもを、いちいち報告しなくていい」

貫太の声もことのほか語気が強く、こんなたくましい声を出す男だったのかと、凜子はまじまじと貫太の目を見た。

それでも凜子は、

「秘密って何？あなたの秘密なんてわたしの秘密に比べたら……」と声を詰まらせながら言い返す。

「急にどうしたの？」

貫太は凜子の急変した態度に、ただ驚いている様子だった。

「何でもはつきり言ってよ。いつもあなたは嘘ばかり。ほんとうはこどもが欲しいくせに。ほんとうはこどもが好きなくせに」

と、まったく関係ないが、日ごろ自分が一番気にしていることを、はじめて貫太の前で口にする。

「ぼくは、こどもは好きでも嫌いでもないよ。

それに……、話がすり替わったよ」

「じゃあ、好きでも嫌いでもないのに、なぜあなたは、児童養護施設で働いているの？ほんとうはこどもが好きなんですよ。でもわたしに気を遣って、こどもが産めないかもしれないわたしに気²

を遣つて……」

それから言葉にならなかつた。

凜子の目からは涙が溢れ出し、両手で持っていたクロバーの鉢の中に滴が落ちた。

貫太は言葉を返す代わりに、凜子の肩を抱くとロビーの隅のソファに導いた。

言葉を重ねれば重ねるほどに、凜子の話す言葉にはますますふるさとのアクセントが加わり、だんだんと昔の自分に戻っていくのを感じる。

そして長い間、常に思い出すまいとしていたことも時代の記憶の断片が蘇る。

幼い頃遊んだ田舎の風景、個人情報保護など通用しない近所まわり。おまけをしてくれたちいさなスーパのおばちゃん、何度も売り物の靴をはかせてくれた商店街のおじさん。東京に出るときに駅まで見送りに来てくれた家族や親せき、持たせてくれた手作りのお弁当。

なぜ、こんなときに思い出すのだろうと考えたときに、その引き金になったのは、自分がふるさとのアクセントやイントネーションをつけて話したからだと思ひあたった。

貫太は凜子の向いに腰をおろした。

凜子の投げかけた質問や、提供した話題には触れずに、彼はただ遠い目をして「楽しい旅だったな」としみじみ言った。

「うどんをたらふく食べて、こんぴらさんにお参りに行って、電車の窓からいくつもの鯉のぼりを見た」

凜子は貫太のことばに耳を澄ませる。

「今日は、鼻歌を歌いながら四つ葉を探して、君の帰りを待った。帰って来なかったらどうしようと不安になったりもした」

貫太の言葉に心の中でそつとうなずくことが、このときの凜子にできる精一杯だった。

「でも君は帰ってきた。どこへ行ってきたのかは別として、君はぼくのもとに戻ってきた。ロビ―でぼくを見つけてくれたとき、ぼくはしあわせだった」

「……」

「それで十分じゃないか」

凜子は静かに首を縦に振った。

「ほんとうは四つ葉を君にプレゼントしたかったけど、見つけられなかったから」

と言つて、貫太は汚れたクローバーの一枚を自分のてのひらに乗せた。

「プロポーズがまだだったな」

ふたりが結婚の約束をしたとき、貫太がまだプロポーズの言葉は決まっていなかったから、もう少し待つて、と言つていたことを凜子は思い出した。

いまとなつては、結婚をしようと言いだしたのが、どちらからであつたのかさえ、忘れてしまった。はつきりとした言葉はなく、なんとなく双方の合意のもと、自然な成り行きで婚約に至つたよ
うな気がする。

凜子は身構えた。

目の前の男は珍しくもなんともない、凜子が買つてきたのとは比べ物にならないくらい野性的で貧相な三つ葉のクローバーを手に、どんなプロポーズをしようというのか。

貫太は、左のてのひらに乗せたクローバーの葉を拾い上げ、凜子に差し出す。

「クローバーの四枚目は、最後の一枚は、これ

からいっしょにさがしに行こう。ともに人生を歩んで、ぼくたちなりのしあわせを、最後の一枚を、さがしに行こう。そしていつの日か、三つ葉を四つ葉にしよう」

貫太は一息に言い、凜子は彼からちいさな葉っぱを受け取った。

貫太はもしかしたら旅のあいだ中ずっと、ポーズの言葉を考えてくれていたのかもしれない。栗林公園を歩きながら、こんぴらさんの石段をのぼりながら、「ぶっかけの大」を注文しながら……。

それを思うと、貫太に対する愛しさがどつとこみ上げてきた。思えば、彼は常になにも考えていないように見えて、いつもひそかにひとが喜び笑顔になれる方法を考えているひとだった。彼が、大きな心の持ち主で、常に情緒の安定しているひとだからこそ、凜子は昔の恋人に会いに行くなどという冒険が思い切つてできたのだ。

貫太は凜子の涙を自分の指先でぬぐった。そして、「ああ、四つ葉のクローバーが見つかった。それらなあ」と残念そうに呟いた。

「気持ちだけでうれしかった」

凜子はそう言つて貫太をまつすぐに見た。

「それに、簡単に四つ葉が手に入るなんてつまらない。なかなか見つからないからこそ、希少だからこそ、さがす価値があるんだもの」

この日流した涙が、過去のすべてを流してくれたような気がした。ひとに抱いたマイナスな感情も、失敗も、何も考えずに吐き出した自らの醜い言葉さえも……。

(以上8月1日放送分)